

委託事業実施内容報告書

平成24年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【地域日本語教育実践プログラム(A)】

受託団体名 船橋市国際交流協会

1. 事業名称 初級修了者対象日本語実践プログラム

2. 事業の目的

「船橋市国際交流協会の日本語教室の在り方(在住外国人のためにできること)」を中心に、「生活者としての外国人」が地域社会に地元住民の一員として参加できるようになるために必要な日本語とは何か、それを身につけてもらうための方法はどうすればよいか、について学習支援ボランティアが学ぶ機会を設け、実践につなげること。

特に初級レベルの知識はあるがそれをコミュニケーションに生かすことが困難な外国人学習者を対象とする。

3. 事業内容の概要

- ①場面に即した日本語・誤解を招かない日本語表現について、学習者＝生活者としての外国人が、日本人社会で通用する日本語を使えるようになるために何ができるかを「カリキュラム案、ガイドブック、教材例集」を教材として考える。
- ②日本語初級を修了したが実際には使えない学習者が、既習知識を組み換え体系整理をして使えるようになるために、学習支援ボランティアができることを考える。
- ③船橋市国際交流協会の日本語教室で日本語初級を修了した学習者を対象に各学習者のための日本語教育プログラムを考える。その過程でプログラムに適した学習教材を作成する。
- ④船橋市国際交流協会の日本語教室で日本語初級を修了した学習者を対象に、③のプログラムを実践し、評価を行う。

4. 運営委員会の開催について

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題	検討内容
1	9月3日(月)	2.5時間	船橋市役所会議室	柳澤好昭、宿谷和子、関恵美子、鈴木富美子、宮慶助、大前肇、石原道正、宇佐見佳代子、浦和かほる、家景子、羽鳥賢二	講座の構成	事務局提案の企画案をたたき台として、委員全体の意見交換により、講座全体の構成を決定した。
2	10月1日(月)	2.5時間	船橋市役所会議室	柳澤好昭、宿谷和子、関恵美子、鈴木富美子、宮慶助、大前肇、石原道正、宇佐見佳代子、浦和かほる、家景子、羽鳥賢二	受講者募集・講座日程・内容	受講者募集要項案を確認し、プログラムの具体的な日程を決定した。
3	3月11日(月)	1.5時間	船橋市役所会議室	柳澤好昭、宿谷和子、関恵美子、宮慶助、大前肇、石原道正、宇佐見佳代子、浦和かほる、家景子	講座実施内容の報告	講座実施内容を報告し、今後の活用方法等について意見交換を行った。

【写真】



5. 日本語教室の設置・運営

- (1) 講座名称 初級修了者対象日本語実践プログラム
- (2) 目的・目標 作成した教材を用いて「使える日本語」学習支援の方法について考える。
- (3) 対象者 初級修了者(学習者)・教授者
- (4) 開催時間数(回数) 19.5 時間 (全 19 回)
- (5) 使用した教材・リソース 各グループで作成した教材
- (6) 受講者の総数 58 人

(出身・国籍別内訳

インド2人、フィリピン10人、中国24人、韓国1人、ペルー1人、
タイ7人、台湾4人、ウクライナ1人、ベトナム3人、スリランカ1人、米国1人、
モンゴル1人、ラオス1人、ブラジル1人)

- (7) 受講者の募集方法
市内日本語教室にメールで開催通知を送って募集。また、近隣市国際交流協会にも案内を送付し、希望者からの受講申し込みを受け付けた。

- (8) 日本語教室の具体的内容

第一部 (4回): 「使える日本語」とは何かを考える

(『標準的なカリキュラム案』について作成の目的・活用方法、及び外国人が社会参加するために必要な日本語学習支援について、講義により理解を深める。)

第二部 (5回): 初級修了者向け「使える日本語」学習支援のための教材作り (『標準的なカリキュラム案』を活用して)

第三部 (4回): 作成した教材を用いて「使える日本語」学習支援の方法について考える (教室での実施および検証も行う)

回数	開講日時	場所	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
1	1月22日(火)	千葉市中央コミュニティセンター	3人	フィリピン(1)、中国(2)	教室での教材実践検証	公共交通機関を利用して最寄駅より目的地の駅まで行く
2	1月26日(土)	稲浜公民館	8人	中国(7)、韓国(1)	教室での教材実践検証	公共交通機関を利用して目的地へ行く
3	2月1日(金)	浦安市国際センター	1人	フィリピン	教室での教材実践検証	公民館を利用する
4	1月22日(火)	船橋市二和公民館	3人	フィリピン	教室での教材実践検証	人とのかかわるー「日本人らしい言い方だ、どうなるでしょう」
5	1月29日(火)	船橋市二和公民館	1人	中国	教室での教材実践検証	人とのかかわるー「日本人らしい言い方だ、どうなるでしょう」
6	2月12日(火)	UIFA事務所(浦安)	1人	中国	教室での教材実践検証	人とのかかわるー「日本人らしい言い方だ、どうなるでしょう」
7	2月15日(金)	国際交流センター(浦安)	2人	ペルー(1)、中国(1)	教室での教材実践検証	人とのかかわるー「日本人らしい言い方だ、どうなるでしょう」
8	1月30日(水)	船橋市東部公民館	10人	フィリピン(2)、タイ(2)、中国(2)、台湾(1)、ウクライナ(1)、ベトナム(1)、スリランカ(1)	教室での教材実践検証	市の広報紙から子育てのサービスを見つけ、申し込む
9	2月6日(水)	船橋市東部公民館	7人	中国(3)、台湾(1)、米(1)、タイ(1)、モンゴル(1)	教室での教材実践検証	市の広報紙から子育てのサービスを見つけ、申し込む
10	2月13日(水)	船橋市東部公民館	7人	中国(3)、台湾(1)、米(1)、タイ(1)、モンゴル(1)	教室での教材実践検証	市の広報紙から子育てのサービスを見つけ、申し込む
11	1月25日(金)	船橋市葛飾公民館	1人	中国	教室での教材実践検証	銀行口座開設
12	2月5日(火)	船橋市中央公民館	4人	タイ(1)、インド(2)、中国(1)	教室での教材実践検証	銀行口座開設・印鑑を作る
13	1月25日(金)	船橋市薬円台公民館	1人	ラオス	教室での教材実践検証	求職活動
14	2月12日(火)	船橋市中央公民館	3人	中国(2)、ベトナム(1)	教室での教材実践検証	自分の希望の仕事を探す
15	1月28日(月)	船橋市男女共同参画センター	4人	中国(1)、ベトナム(1)、ブラジル(1)、フィリピン(1)	教室での教材実践検証	余暇を楽しむ(家族と休日を過ごす)
16	2月6日(水)	船橋市東部公民館	4人	タイ(2)、フィリピン(1)、中国(1)	教室での教材実践検証	余暇を楽しむ(家族と休日を過ごす)
17	1月26日(土)	船橋市東部公民館	1人	中国	教室での教材実践検証	救急車の呼び方(本人・家族)
18	1月16日(水)	船橋市東部公民館	2人	タイ(1)、フィリピン(1)	教室での教材実践検証	宅配便の受け取り
19	2月4日(月)	船橋市男女共同参画センター	2人	台湾	教室での教材実践検証	地震発生時に適切に行動する

(9) 特徴的な授業風景

◎2月4日(月) 船橋市男女共同参画センター

「地震発生時に適切に行動する」



東日本大震災の時に、どこにいて、とっさにどのように行動したかを質問
(「夫の実家」・「地下のカフェ」と回答。2人とも台湾の方なので、地震には比較的慣れている)
非常時には防災無線で放送が入ること、避難所が開設されることなどを説明

◎2月5日(火) 船橋市中央公民館

「銀行口座を開設」



実際に銀行口座開設申込書の記入を体験。
「フリガナ」や、「年号」について解説。(年号が変わる仕組みについては、特にインドの2人が大きな関心を持っていた。)
記入時には、「代筆」は不可で、金額以外の部分は「印鑑」を押して直すことで訂正できるが、金額の部分だけは決してそのようには訂正できないことを説明。全員、銀行口座開設申込書を完成させて終了。

(10) 目標の達成状況・成果

特定の学習者をサンプルとして教材を作成したが、実践してみたらレベルが合わなかったり、学習者が来なくなってしまうたり、設定変更を余議なくされることもたびたびあった。それでも、具体的な場面に基づく授業は、学習者にはイメージがしやすく好評だった。

(11) 改善点について

教材として確立させるためには、設定した学習者のレベル情報を共有し、共通の「サンプル学習者」を設定する必要がある。

6. 日本語教育を行う人材の養成・研修の実施

(1) 講座名称 初級修了者対象日本語実践プログラム

(2) 目的・目標 「使える日本語」とは何かを考える

(3) 対象者 教授者

(4) 開催時間数(回数) 27 時間 (全 9 回)

(5) 使用した教材・リソース

(6) 受講者の総数 55 人

(出身・国籍別内訳 日本 55 人)

(7) 受講者の募集方法

市内日本語教室にメールで開催通知を送って募集。また、近隣市国際交流協会にも案内を送付し、希望者からの受講申し込みを受け付けた。

(8) 養成・研修の具体的内容

回数	開講日時	時間数	参加人数	国籍(人数)	取組のテーマ	授業概要
1	11月5日(月) 14:00～17:00	3時間	41人	日本	日本語教育の標準的なカリキュラム案について	地域日本語教室における日本語教育の目的 地域ボランティア日本語教育の問題点 CEFR/Can-do-statementsについての解説
2	11月12日(月) 14:00～17:00	3時間	41人	日本	ボランティアだからこそできる教材研究とは	コースデザイン・カリキュラムデザイン・シラバスデザイン 教材作成過程のフローチャート・重点事項
3	11月21日(水) 14:00～17:00	3時間	41人	日本	地域参加に求められる日本語とは	学習者の声に耳を傾けよう スキットを作ってみよう ロールプレイ実践
4	11月26日(月) 14:00～17:00	3時間	49人	日本	場面に即した日本語とは	教授法変遷の歴史 文法・文型中心の教授法と、コミュニケーション中心の教授法それぞれの長所・短所
5	12月3日(月) 14:00～17:00	3時間	47人	日本	ボランティアだからできる教材作り	地域社会での日本語教育に求められるもの(学習者側の視点・教育側の視点) 誰(教授者・学習者)のために何が必要か
6	1月28日(月) 14:00～17:00	3時間	33人	日本	教材改良	教材を実際に使ってみたところの発表・意見を取り入れた改良作業
7	2月4日(月) 14:00～17:00	3時間	33人	日本	教材改良	教材を実際に使ってみたところの発表・意見を取り入れた改良作業
8	2月18日(月) 14:00～17:00	3時間	31人	日本	教材改良	教材を実際に使ってみたところの発表・意見を取り入れた改良作業
9	2月25日(月) 14:00～17:00	3時間	30人	日本	教材の仕上げ	グループごとの構成の統一化

(9) 特徴的な授業風景

◎11月5日(月)

日本語教育の標準的なカリキュラム案について



[概要]

- ・「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案は、「生活場面から切り離された抽象的な言語体系を学ぶ」のではなく、「生活者としての外国人」が日本で生活する上で、最低限必要とされる生活上の行為を日本語で行えるようにするための標準的なカリキュラム案を開発したものである。よって、学習順序も学習者のニーズに応じて決めるべきであり、また「完成した教材」という位置づけではなく、今後さらに「教材例の作成」「指導方法」「日本語能力の評価」「指導力の評価」についての検討が必要とされる。
- ・言語を教える、というのは非常に高度で難しいことである。
- ・会話学習は、知識とするものではなく「体感」で覚えるものなので、多くの説明をするのではなく、多くの「実践・シミュレーション・ロールプレイング」をすることがより効果的。また、学習者の母国での生活状況は、日本とあまり変わらないので、状況の説明などでなく、その状況で想定される会話のロールプレイングなどに力をいれて良い。

◎11月21日(水)

地域参加に求められる日本語とは



[概要]

学習者によって、課題・社会的立場が違う。→必要とされる日本語力（読む・聞く・話す・

書く)も違う。

例えば「スーパーで品物を探す」

「シャンプー」は英語だから探せるだろう、と思いがちだが、実際は「カタカナ」が読めて、なおかつその発音の違いまで修正して初めて英語の「shampoo」と同じであることを知ることができる。また、そのため学習者は「英語を日本語のように発音すれば分かってもらえる」ということもあるが、「レーザー」と言っても、それが「剃刀」のことだとは通常分かってもらえない。

ロールプレイをし、実際の現場の状況を再現しながら必要な表現をまとめる。

「タスクを探すこと」こそ、「その人のCANDOを探る」こと。

その学習者の即戦力として日本語が役に立つようになる近道である。

◎12月3(月)

ボランティアだからできる教材作り



[概要]

ヨーロッパで決定された標準語(英語)について、「発話意図をいかに伝えるか」が核となったテキストがある。

もっとも使える表現 から ほとんど使わない表現までのランク分けまで。

日本語には、こういった資料がない。

日本語は、語順が大きく崩れても(ex. 行くんだ、今度、京都。)その全体をくみ取って理解することができる。一方で、誤解を招く表現も多い。

例:「バスケの試合、じゃんけんで勝った人が出る。」

出るのは、試合に?それともコートの外に?

言語教育は、その文化背景の相互理解と切り離すことができない。

ボランティアが日本語教育することには、賛否両論あるが、多方面からの日本語を学ぶ、という観点では適している。市販のテキストを比較しながら、自分たちの強み・弱み・環境などを鑑み、中級者に適したテキストを生み出す。

(10) 目標の達成状況・成果

教材作りに不安を持っていた参加者たちも、講義を通して教材作成の意欲が高まり、また

具体的なノウハウも知ることができたため、教材の作成作業や実践検証に、積極的に取り組むことができた。

(11) 改善点について

参加者の中には、最終的に教材を作成して文化庁へ提出し、文化庁のホームページに掲載される、ということを認識していなかった者もいたので、成果物の完成度を上げるためにも、この段階から目的をよく認識させておくべきだった。

7. 日本語教育のための学習教材の作成

- (1) 教材名称 なし
- (2) 対象 教授者
- (3) 目的・目標 初級修了者向け「使える日本語」学習支援のための教材作り
- (4) 構成 「標準的なカリキュラム案」の大分類からそれぞれテーマを選んだ、計10グループが作成した教材を集約
- (5) 使い方 各日本語教室で、既存のテキストによる授業と並行して各々アレンジしながら活用
- (6) 具体的な活用例
銀行で口座を作る
駅員に行き先を伝え、行き方を確認する
就職活動をする

8. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的

日本語初級を修了したのに日本語が「使えない」学習者をどう支援していけばいいのか。また、文化庁が提案している『標準的なカリキュラム案』を日常の教室にどのように取り入れたらよいかをボランティアの立場から考える講座を開催する。

(2) 目標の達成状況・事業の成果

視点の違う諸先生方からの講義を受けて、各々が「日本語教育の在り方」を考えた上で教材を作成したが、実践検証が予定通りに行えなかったり(対象とした学習者が教室に来なかった)、メンバーの都合で実践の回数を重ねることができなかったりで、成果物は改良の余地の多いものとなった。しかし、参加者自身は、教材作成・検証を実践することにより、学習者の本当のニーズを知る機会を得ることとなり、この講座が、彼らの今後の日本語ボランティア活動をより高レベルのものにしていく一助となったことは確かである。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

教材作成の際に、カリキュラム案の「生活上の行為の分類一覧」をベースとし、初級修了者の状況に合わせた場面設定に展開した。生活全般が分類一覧に網羅されているので、全体としての過不足を補足する必要性を感じることなく、設定した場面を充実させることだけに力を注ぐことができた。

教材例集に倣い、各グループの教材の体裁を統一したが、そのことによって本来イメージして

いた通りに形にすることができず、大きく変更せざるを得なかったグループもあり残念だった。
また、「データでの提出」であったため、参加者のPCスキルによってはかなりの負担だった。

(4) 地域の関係者との連携による効果, 成果 等

近隣他市のボランティアと、教授法等の話し合いを通して意義深い交流ができた。また、相互に教室での活動を客観的に見ることができ、自身の反省・改善意欲につながった。

また、運営委員でもあるコーディネーター2名も講座に参加していたため、特に教材の実践検証の発表の場などでは適切な意見・アドバイスを受けることができた。

(5) 改善点, 今後の課題について

参加者に対し、教材を作成する意義をより明確に認識させる必要があると思う。

具体的な対象者・場面を想定しての限られた範囲の教材でさえ、完成させるには様々な課題（レベルを合わせる。対象者のイメージを共有する。学習者のニーズを把握する。肖像権・著作権問題の回避、など）が浮き彫りとなったが、自らが教材作成をする必要性・意義を明確に認識している参加者は、それらをやり切ることができ、そこから自らの教授法を深めていくことが出来た一方で、イメージした素晴らしい教材を、データとして形にするスキルがない場合をどのようにフォローするかについては今後の課題と言えると思う。